

批評及び紹介

フリードリヒ・ヒルト博士

第七十五回誕辰祝賀記念

論文集二種

石田 幹之助

コロンビア大學名譽教授フリードリヒ・ヒルト博士、昨一九二〇年を以て第七十五回の誕辰を迎ふ。主としてドイツに於ける博士の同學・門生等三十名、各論文一篇を草し編して一卷となし之を博士に捧げて賀意を表す。又別に同じく博士の支那學に於ける功績を慕ふ者、互に相諮りて研究二十四篇を輯し之を博士に獻じてその壽を祝はんとす。前者は昨年既に上梓せられ今春早く余の寓目するを得たる所、

後者亦將に鉛槧の工成らんとして出售の書肆近くその内容の一斑を報じ來る。爰に併せて二者の論目を列舉し以てその全豹の紹介に代ふる、亦必しも徒爾の業に非るべし。

昨年既に出版せられたるものは、題して“Festschrift für Friedrich Hirsh zu seinem 75. Geburtstag”と云ひ、別に編者の名を示さず。初めベルリン市Oesterich & Co.發售に係る雜誌“Oesterische Zeitschrift”第八年第一—四冊(但し合一本)として刊行せられたるものにして即ち同誌一昨年四月乃至昨年三月分に該當す。頃者布裝を経て單行本として行はるゝものあるを見るも敢て別本に非ず、唯だ卷頭の標紙一葉を異にし、ヒルト博士小照の位置を變ぜるあるのみ。四ツ折判一冊巻首陸頁、本文三九四頁、索引

八頁(三九五—四〇二頁)、圖版十葉、地圖一枚、外に數個の挿繪を添ふ。圖版の第一は實に博士最近の照相なり。⁽⁵⁾博士齡古稀を過ぐる數歲、而も猶此照相の如くんば其風丰頗る元氣横溢の概あり。先年その名著「太秦全傳」(“China and the Roman Orient”)増補改訂の意を宣す。余私に其老來意氣更に旺なるを壯とせり。今この少照に對し良にその故あるを思ふ。然れども客春北京大學教授王君文伯(名は徵)、米國より回燕の途偶々余を過り告ぐるにヒルト博士の近狀を以てす、曰く、博士頃者身神頓に衰へたり、恐らくは筆硯復た多祥なるを得ざるべしと。果して然るか。聞道く、博士常に云ふ、Ich muss zum Tode arbeiten と。玆にこの小稿を草するに臨み、余は再び博士が健康・元氣並に恢復せられ斯界に重來雄飛せられんことを望んで已まざるものなり。

本書先づ内容一斑の目次を挙げ、次にヒルト博士論著目錄を掲ぐ。(SS. 16) 一八六九年、ロストッ

ク出版の學位論文⁽⁶⁾よりして一九一七年「米國東洋學會雜誌」に掲出せる「史記」大宛列傳英文全譯⁽⁷⁾に終る、併せて一百六種。之を通觀して博士の研究の多方面なると、その支那學に致したる貢獻の如何に大なるかとを想ふべく、又以て博士が學的生涯の進展を髣髴するに足るべき資となすべし。目錄の次に三十家各一篇の寄稿あり、之を開列すること次の如し。

一、フランチ・バービンガー氏「イサアク・ヤコブ・シミット傳」(Franz Babinger, Isaak Jakob Schmidt 1779-1847.) (SS. 7—21)°これ從來その傳記明瞭を缺き、誤傳多かりしロシアの東洋學者シミットの一生を攷へしもの、シ氏の生年月日、出自郷貫等に關し著者が定めて一七七九年十月十四日、ヤン・シミット(Jan S.)及びその妻アンナ・ファン・ダム(Anna van Dam)の長子としてアムステルダムに生ると斷ぜしが如き、舊説の誤謬を正して餘りあるものと云ふべ

に

し。本篇また獨りシミットの傳を窺ふに足るのみならず、彼と時を同じうせる同學諸家の面目をも併せ徴するこゝを得べし。Heinrich Julius Klaproth, Abel-Rémusat, A. von Theodor Hartmann, Christian M. J. Frähn, Ernst A. P. Malin, O. G. Tytchen, Josef M. Kowalewski, A. W. Popov, Franz Anton Schiefner, Otto Böhtlingh, Robert Lenz, Alexander Csoma de Körös, Heinrich A. Jäschke 等は即ちその二三とす。十八世紀末乃至十九世紀前半の東洋學史、またその一端を本篇の中に反映せりとも云ふを得べしか。次は

二、ウイールヘルム・バンク氏「トルコ諸語史の一節」(Aus dem Leben der Türkischen Sprachen)と題し—eifügに終る諸語の由來を論じ、多くの實例に就きてトルコ語系諸語の轉成變化生育の迹を明かにす。(SS. 22-35)。トルコ語の注目すべき研究と云ふべし。之と相類し古代トルコ語を同じくその主題とせるもの

四、カール・ブローケルマン氏の「古代トルキスタン
の俗諺」(Carl Brockelmann, Altkirgistanische Volks-
weisheit)(SS. 50-73)等。一〇七三年 Mahmud ibn
al-Husain al-Kasgarī 著す所の“*Diwān lughat al-Turk*”
より、その載する所のトルコ俗諺二百六十四章を抽
出し、之が原文と共にその獨逸語譯を掲げしもの、一
篇の主として目的とする所は「トルコ語史の研究者
に對し、右の書に收められたる資料を容易く提供せ
んと欲する」にあり。これ著者自らの云ふ所なり。
然れども他面これら俗諺の内容を檢し、當時この地
方に於ける民衆通俗の思想程度を察すべく、又これ
らに反映せる他族の文化の跡を尋ねて東西思想交錯
の一面をも窺ふべし。

三、はアンナ・ベンハーディ (Anna Bernhardt)
女史の白樂天の詩「洛中九老會」譯註なり。題して「白
居易の「詩」(Eine Dichtung Po Ki-t's)(SS. 36-41)

と云ふ。從來白氏の詩の歐西諸國語に翻譯せられしもの必しも少しとせず、而も今新に又一を加へたるは西人に對して更に香山研究の便宜を與ふるものと稱すべく、譯註者ベルンハルディ女史は嚮に陶淵明の詩を譯して名ありし人、漢詩の翻譯は或はその力を注ぐ所なるか。

四、ベツォールト氏「司馬遷とバビロニアの占星術」(Sze-ma Ts'ien und die babylonische Astrologie) (SS. 42-49) は「史記」の天官書中に見えたる諸種の占星術の記事を把つてアッシェルバニバル時代の楔形文字記録と對比し、その間の類似一致を指摘して「史記」に記されたる支那の占星術的知識には多く西亞地方の影響あることを斷じ、古代支那に於てその獨特の天文思想・占星思想ありしを認むると同時に、之に深きバビロニアのそれらの感化ありしを説けるものなり。支那の天文歴數と西亞のそれとの比較研究は從來屢々東西の學者に依りて試みられし

所、必しもその數に於いて乏しとは云ふべからず。然れども最近この問題に就きて稍々精緻なる研究を遂げ、特に「史記」の記載を以て西方史料に對比せしものとしては Jastrow 氏の「Die Religion Babylonians und Assyriens」(II. 2, Giessen, 1912, SS. 745-748) を推挙するを得ず。^⑤ベツォールト氏夙にアッシリア・バビロニアの學に精しく、頃者支那古代の天文・占星の思想と西方のそれとの關係に注目してこの一篇あり、「ヤストロフ氏の研究に更に一步を進め」たるものとして、古代史に志あるものゝ留意すべき論文なり。

六、ファイスト氏「トカラ人問題の現状」(S. Feist, Der gegenwärtige Stand des Tocharerproblems) (SS. 74-84) は近時歐洲東洋學界に喧しき中央亞細亞新發見の古代言語並に古代民族に關する問題を扱へるものにして、主として諸家の論説を紹介するを目的とせり。顧るに中亞の遺跡より諸國の探検隊が

齎し歸れる上代文化の遺品の中に、一千年來絶えて人類の記憶を逸せる古代言語の發見せられてより以來、言語學者は勿論、東洋史家東洋考古學者の興味を中心は翕然としてこれら不明言語の讀破攻襲に移り、幾多の新説新研究の提唱を見たること世の既によく知る所なり。就中ストラスブルヒの Leumann 教授が假に稱して第一言語と云ひ、ベルリンの F. W. K. Müller 博士、キールの Siegel 及び Siegeling 兩氏の呼んでトカラ語 (Tocharisch = tochari) となし、パリの Lévi 教授が定めて龜茲語焉耆語 (Kontchéen; Karacharien) と云へる一種の古代印歐語に就いては最も議論多く、研究の進展に従ひ益々問題の紛糾を致すが如き觀を呈せり。フェイスト氏この論争の經過を叙し、この言語の名稱如何、ウイグル人が之をトカラ語 (tochari) と命ずることに理ありとせばこのトカラなるものは果して如何。かのギリシヤ・ローマの記録に見ゆるトカラ人なるものと何等かの關係

ありや否や 漢武の時代より唐末に至る間、東トルキスタンに住してこの言語を語りし問題の民族はその初め何れの地より來れるものか、その言語に多くの外國語の影響ある點より論ぜばその民族は名を同じうするも常に果して同一のものなりしや等の疑問を擧げ諸家の説を引いて之に答へ、進んで一九一八年ジーク氏がこの民族が自ら稱して *Yäz* と云へるを發見して以來、このアールシを以て漢史の所謂月氏に當てんとするミューラー、フランケ等諸氏の提説を紹介し、最後にこの所謂トカラ語なるものが、かの印歐語中の *Saken* 派に屬せず、却つてその *Ken-tum* 派に屬するが如き觀あるにより動もすれば之を以てこの西方印歐語族の東方に存せし一支派なりと認めんとする一般的傾向を批判し、兩者の類似極めて多しと雖も全く相關せざる點亦決してなきに非ず、その類似一致の諸點と雖も或者は *Kentum* 派なるが故の類似一致に非ずして *Saken* 派なるもその

稍々變化して偶々彼に接近せしものと認められざるにも非るあり、トカラ語即 Kentum 派説の勢、今や漸く學界に普ねからんとすと雖も、この説敢て遽に首肯すべからずと云ひ大いに吾人を警戒する所ありて筆を擱けり。近時このタクラマカンの砂磧の中より發見せられし一死語の問題喧しきに際し、本篇は諸家の言説の大綱を知るに便なるものとして正に學者の一讀に價すべし。ファイスト氏のこの一篇と最も關係深きものに

九、オットー・フランケ氏の「古大夏國攷」(Otto Franke, Das alte Ta-hia der Chinesen) (SS. 117-136) 並に一五、ステン・コノウ氏の「月氏攷」(Sten Konow, Beitrag zur Kenntnis der Indoskythen) (SS. 220-237) あり、並に併せ讀むべきものと信ず。これらの諸説茲に一々詳しく抄出するに足る紙面を有せざるを憾じと雖も、各々種々のサヂェスチオンに富みて吾人を啓發するところ尠少に非ず。然れども漢史に

親しき吾等邦人の眼を以てせば、この方面に於ける歐西學者の缺陷より來る遺憾の點亦決して少しとせず。或者は月氏を以てトカラ人と同一視し、或者は月氏と貴霜諸王とを以て同族とし、他を駁するもの自己に誤あるを知らず、誤を以て誤を擧げ、轉々盡くる所を知らざらんとす。誠に惜しむに堪へたりと云ふべし。余以上の諸論並にその引く所の論著原文の大抵を一瞥し、比較的正確なる月氏攷貴霜攷、大夏國攷・トカラ語攷等を草するは正に本邦學者の責務なるべきを痛感せり。我が學に東洋の研究に従はるゝの諸子、歐西學者を紙上に邀へて一戰を試みんとするに際し、これらの問題は以て重しとなすに足らずとなすや否や。

七、オットー・フイシャー氏「支那人物畫法に於ける十八筆法」(Otto Fischer, Aehnlich Stützen der Chinesischen Figurenmalerei) (SS. 85-102) は「點石齋叢畫」載する所の高古遊絲描・蚯蚓描・行雲流水

描鐵線描琴絃描曹衣描混描戰筆水紋描橄欖描柳葉描釘頭鼠尾描馬蝗描棗核描竹葉描折蘆描擷頭釘描枯柴描減筆描の十八描法を譯述解説せるもの、支那に於ける畫法の理論を稽ふる者の參攷となすべく、

八、アルフレッド・フォルケ氏「支那古代の攻城戰」(Alfred Forke, Der Festungskrieg im alten China) (SS. 103-116) は「墨子」を資料として上代支那に於ける攻城戰を攷へ、その戰法の古へよく既に發達せるを述べたるもの、著者が主として材を墨子に取れるは「左傳」「孫子」「周禮」等がその記すところ多く野戰なるに對し、墨子は攻撃を非とし守戰のみ認めたるにより自らその書に守城の事多く、從つて又之を攻城の事を論ずる材とすべきによれるものなり。

一〇、デ・ホロオト(J. J. M. de Groot)氏は“Chinesischer Purismus bezüglich einiger Freundinnen”と

題し、支那人が外國語の音譯に際して種々文字を選擇洗練するの結果遂にその原音を窺ひ易からざるに至る例證二三を提出せり。(SS. 137-141)。支那の外國語音譯法には一方既にデュリアン、ヒルト氏等に依りて唱へられ、近くラウファー氏等に依りて高調せらるゝが如き原音を正確に寫さんとする爲の文字洗練の傾向あると共に、他方デ、ホロオト氏の謂ふが如き事實も亦その存在するを認めざるべからず。但し氏の舉げたる實例が果して氏の云ふ所の如きものなりや否やはなほ大いに議論の餘地あるべく、少くも「漢書」西域傳の蘇離を以て Sogd の音譯と認めんとするの類は到底學者の贊同を期待し得べからざる所なるべし。次に

一一、ハックマン(H. Hackmann)氏の“Die Mönchsregeln des Klosterlebens” (SS. 142-170) 氏は一九一一年一月より三月に亙り山東省勞山なる道觀太清宮に就きて親しく道士の生活を觀察せし際、

幸に氏の見るを得たる *Klosterfacismus* 即ち全真教の戒律初真戒中極戒天仙大戒の三種を解説し、特にその最初の一戒を譯出せるものに係る。

一二、ヘーニシ氏の「滿洲諸姓攷」(*E. Hämisch, Beiträge zur almandschurischen Geschlechterkunde*) (SS. 170-184) は「入旗滿洲氏族統譜」(*Jakon g'asai Man-jusai mukon hala be uberi ejale bithe*) を資料とし、滿洲諸族の姓氏の由來を究めしもの、支那語の轉訛して滿洲語化する氏名を例示せる條最も見るべし。⁽³⁾

一三、アルバート・ヘルマン氏の「支那最古の中國並に西亞圖」に就いての攷 (*Albert Hermann, Die ältesten chinesischen Karten von Zentral- und Westasien*) (SS. 185-198) は著者の専門たる歴史地理學上の勞作にして、ヘルマン氏は漢西域圖魏西域圖隋西域圖とも稱すべきものがそれ、張騫の時代、北魏の時代、隋時代(裴矩の「隋西域圖記」の附圖と

して)に存せしに相違なき事を論證し、その各々が果して如何なる面目を有せしものなるかを文獻に據りて復原せんと試みたるものなり。次の

一四、ヒューレン氏「獨逸圖書館所藏漢籍の公開に就て」(*H. Hülsen, Die Erschliessung der chinesischen Büchersätze der deutschen Bibliotheken*) (SS. 199-219) は獨逸各地の圖書館に存する漢籍をして死物たらしめず、之を廣く學者の繙讀に便せんが爲には如何なる手段を取るべきかを述べたるものにして前半には漢籍概論とも云ふべき解説的記事數頁を添へたり。本篇は

一四、ゲオルグ・ライスマーラー氏「バイエルン國立圖書館漢籍文庫の由來に就て」(*Georg Reismüller, Zur Geschichte der chinesischen Buchersammlung der Bayerischen Staatsbibliothek*) (SS. 331-336) と併せ讀むべし。

一六、クラウゼ (*Krause*) 氏の「Das Mongolenreich

nach der Darstellung des Armeniens Hethen" (SS. 238-267) はハイトンの「東方史」(Haitoni Armeni historia orientalis: quæ eadem et de Tartaris inscribitur)に據り、同書に現はれたる當時の蒙古帝國の狀況を詳しく展開せるもの、蒙古史の研究者を裨益すること蓋し尠少に非るべし。(クラウゼ氏の據れる底本は一六七一年ヘルリンの Andreus Müller がアルコ・ポロ紀行と合綴刊行せるラチン語本にして、これ一五五五年バーゼルにて開雕せられたるものを覆印せるものに外ならず)⁶⁾

次に一七以下の諸篇を一括して先づ列舉せば左の如し。

- 一七、クレブス氏「支那に於ける政治上の諷刺畫」
(E. Krebs, Die politische Karikatur in China)
(SS. 268-274.)
- 一八、オットー・キューメル氏「支那に於ける雪舟」
(Otto Kumm l, S. schu in China)(SS. 275-283.)

- 一九、ファン・ルコック氏「トルファン附近カラホーヂヤ・アースターナ發見土支兩文の「布告」」(A. von Le Cq, Ein chinesisch-türkischer Erlaß aus dem Doppeldecken Qara-Chodscha-Ästana bei Turfan) (SS. 284-288.)
- 二〇、マルクヴァルト氏「中世」中亞並にシベリアに於ける諸種族關係記事雜稿」(J. Marquart, Skizzen zur geschichtlichen Völkerrunde von Mittelasien und Sibirien) (SS. 283-299.)
- 二一、ハーバート・ミラー氏「尉遲乙僧筆天王像攷」(Herbert Müller, Der Dävarāja des Wei-chih-I-séung) (SS. 308-309.)
- 二二、エフ・エー・カー・ミラー氏「回鶻語解」
(F. W. K. Müller, Uigurische Glossen) (SS. 310-324.)
- 二三、オスカー・ナーホッド氏「最初の日本渡來歐人の一人に關する未だよく知られざる一記録」

(O. Nachod, Eine wenigbekannte Schilderung eines der ersten Europäer in Japan) (SS. 325-330.)

二四、(既出)

二五、ザーン氏「東亞陶瓷と西亞陶瓷との相互關係 (F. Sarre, Wechselbeziehungen zwischen ost-asiatischer und vorderasiatischer Keramik) (SS. 337-344.)

二六、シャーン氏「ユルペ佛教美術に於ける奏樂諸仙像」(L. Schermann, Musizierende Genien in der religiösen Kunst des birmanischen Buddhismus) (SS. 345-353.)

二七、シミット氏「最古所傳の婚嫁習俗を通じて見たる天地陰陽教思想の史的發展に就いて」(E. Schmitt, Ein Beitrag zur historischen Entwicklung des Universalismus auf Grund ältester überlieferter Heiratsitten) (SS. 354-361.)

二八、シック氏「トカラ文機械工と畫師の話」(E. Sieg, Das Märchen von dem Mechaniker und Maler in tocharischer Fassung) (SS. 362-369.)

二九、デントセル氏「支那日本に於ける孔雀明王に就いて」(M. W. de Visser, Die Pfauenkönigin in China und Japan) (SS. 370-387.)

三〇、ツィンメルマン氏「支那陶瓷史研究に關するフリードリヒ・ヒルト氏の功績」(E. Zimmermann, Friedrich Hirths Verdienste um die Erforschung der Geschichte des chinesischen Porzellans) (SS. 388-394.)

以上の中第一八(オートーキンメル氏の論文)は畫聖雪舟渡明の始末を彼と時を同じうせる禪僧の隨筆手記、例へば了菴桂梧の「天開圖書樓後記」杏林良心の「天開圖書樓記」彦龍周典の「半陶集」梅菴萬里の「梅花無壽藏」季弘大淑の「蔗軒日錄」等の根本史料に就き之を利用批判して叙述攷證せるもの、

日本美術史乃至日本畫人傳に對する一貢獻となすに足るべし。次に第一九に於いてフォン・ルコック氏は光緒十七年四月初八日附漢文・トルコ文對照欽加鹽運使銜新疆候補道李某の一布告文を掲出し、そのトルコ文を譯出してその語彙中に如何に支那語の分子多きかを摘出し、新疆地方に於る支那文化の感化の如何なるものなるかを示したるが、氏の云ふ所に據れば之を氏等が同地方發掘の業によりて獲たる唐代文書と對比するに、唐代この地域に於ける漢民族文化の勢力影響多大なるものありしと雖も、未だ近時この例の示すが如きものは嘗て存せざりし由にして、その支那語を變じてトルコ語動詞となせし實例の如きは全く吾人の唐代文書に於いて見るを得ざりし現象に係ると云ふ。亦史家の注意すべき事實となすべし。第二〇マルクツォルト氏の寄稿は題名に云ふが如き中世に於けるシベリア及び中央亞細亞の諸種族の民情を明かにすべき世間未流布の史料を紹

介せるものにして并せて三篇より成る。(1)は Yakut の書に錄せらるゝ *Im al Fakih* の記述なるべき傳承の一節を譯出せるものにして同教法皇 *Hişam* (724-743 A.D.) が當時中亞に雄視せる西突厥の一種 *Türgis* (突騎施) の可汗に使者を遣はし、彼等に同教に歸依せんことを勸めてその強大なる武力を己れに加ふることなからしめんとせし事實を述べ、その使節の見聞の中に現れたる西突厥の軍制其他諸種の事情を稽へたり。(2)は *Iki Imuk* (兩姓イメク) 族に關する同じく Yakut の書に引く所の古傳を紹介せるもの、イキ・イメクはイニセイ河中流域に住せしトルコ族にしてその歴史に關しては文獻の傳ふる所甚乏しき憾あり、茲に翻譯註解せられし記事の如きはたとへ十數行の零章なりと雖も最も尊重すべき所なるべし。マルクツォルト氏嚮に *al Gauthani* の「諸道諸國誌」(*Buch der Routen und Reiche* と獨譯せらる) に基きて *Gartelen* が記す所のイキ・イメク

フィリピン遠征隊(一五四二—三)の報告書にして、その隊員の一人 Garcia de Escalante Alvarado の作る所に係り、リスボン、一五四八年八月一日の日附あるものなり。⁽¹⁵⁾この報告の中にエスカランテがそのモルッカ諸島滞淹中(一五四四—四六)常に耳にせし所の極東諸國に關する傳聞の記載あり。中にイスバニア人 Pero Diaz なる者一五四四年一デヤンクに搭じてパタニを發して日本に航し、更に日本よりポルネオを経てモルッカ諸島なるテルナーテの島に到れる物語あり、これナーホッド氏のその要所を譯出して吾人に示せる所なり。吾人は從來日本に到れる歐人にして最初に稍々詳細なる記録を遺せし者として一五四八年(天文十七年)豊前に到れるホルトガルの船長 Jorge Alvarez を擧ぐるを常とするも、今これによりてたとへ間接乍らなほ數年前にその人あるを知るを得たり。⁽¹⁶⁾余は本邦の史學界に關係淺からざるナ氏がなほ健在にして爰にかゝる興味ある異聞を提

供せられたるを喜ばざる能はず。もしそれ Diaz の云ふ所が果して真なりや否や、その述ぶる所或はメンデス・ビンターの亞流に非る無きや否やは宜しく我が國史の研鑽に携はる者の檢覈を試むべき所、余は今唯一新史料の紹介をなすに已まんのみ。(但しこの記録に就いてはナ氏も云へる如く既に瑞典の學者「ストックホルム圖書館長」E. W. Dalgren 氏が細かに攷證する所あり、その說一九一四年度の「倫敦日本協會雜誌」誌上に⁽²⁰⁾出づ、論ずる所は主として日本最初の發見者並にその年時に就いてなれども學者の必ず參攷せられんことを望む)。

第二四は既に云へり。第二五は東西の陶瓷史に造詣深きザイレ氏が極東の陶磁器が西亞の影響を受けたることは明かなれど、その西亞のそれに及ぼせる影響も亦甚だ大なるものとなし、氏の嘗て行へるサマラのアッバス朝回教法皇宮殿址の發掘結果其他の實物上の諸證徴と、之に加ふるに東西特に西方

部訪行記・同民俗誌を譯註して學界を益せることあり、今又更にその増補を見る、洵に學者の喜びとする所なり。(3)は「西部シベリア諸部」と題し、一二二八年以降ヘルシアの文學史家 Muh'ammed i'Arufi が印度に於いて撰述せる浩瀚なる傳説集の記事を根據とし、そのコマン族及びオスマン族の祖先 Qun 及び Qaly 兩種族遷移當時に於ける二三近隣部族の動靜に就いて記述せる所を譯出註釋せるものに係る。この記事は恐らく al Gahani に出てたるべきも Gahani の書には引く所なきものにして亦多少の珍となすに足れりと云ふ。

第二一、ハーバート・ミューラー氏は故端陶齋尙書珍襲の舊宣和御府御物傳尉遲乙僧筆天王像を、上海有正書局一九〇九年刊「中國名畫集」(英名 "Specimens of Old Chinese Pictorial Art") 第二冊收むる所の影印に就いて研究せる所を發表せるが、その眞蹟なりや否やは勿論別問題として假に唐畫に非る迄

も唐朝の畫風を最もよく顯現せるものとしてこの一幅の考證は支那の畫史に心ある者の必らず一顧の要あるべきものなるべく、第二二、エフ・エー・カー・ミラー氏の回鶻語言攷釋は七小節より成り、(1)新舊「唐書」廻紇傳に見えたる廻紇の九姓⁽¹⁰⁾ (2)汗可汗可敦の諸稱 (3)倭斤 (4)不卒祿 (5)洗的兒 (6)Yaghuq (7)nisun, tauya 等を比定解釋せるもの、その一部は既に本邦學界にも紹介批判せられたり⁽¹⁰⁾。その論時に附會の嫌あるものなきに非るも、塞外の語學に従ふ者に種々の貢獻をなすべきこと疑を容れず。第二三、ナーホッド氏の記す所は既に出版せられたるイスバニアの古文書集⁽¹¹⁾に收められたるものなほ廣く世人の注意に上らざる一記錄に據り、一五四四年(天文十二年)南支那より日本を訪へる一イスバニア人の航海譚・見聞錄を公にせるものなり。右の記錄とはメキシコ總督 Don Antonio de Mendoza に宛てたる Ruy López (oder Gomez) de Villalobos が統率せる

の文獻的憑據とを以て其の斷定を證せるもの、第三〇ツインメルマン氏の論文と併せ讀みて支那陶瓷に關する有用なる知識を得べし。第二六は題下に *Verkerundliche Notizen aus Oberbrima. Nr. VI* と附註し、上ビルマに於ける佛像雕刻を論ぜるものにして第二九デ・フィッセル氏の孔雀明王攷と共に佛教美術史上の一寄與となすべし。但しデ・フィッセル氏は管に孔雀明王の圖像を攷へたるのみに非ず、先づ孔雀明王即ち *Mahāmāyūrī vidyārājini* の *Mahāmāyūrī* が日本支那に於いては *Mahāmāyūra* と誤解せられし爲、その元來女性たるべきものが男性として傳承せられし事を指摘し、又 *Amoghavajra* (不空金剛) が之を漢譯する際佛母孔雀明王とせしは恐らく *Māyūrī* を *Mūrti* (摩耶) に附會せる爲なるべきを論じ、なほ佛說大孔雀明王神呪經「佛母大孔雀明王經」大孔雀明王畫像壇場儀軌」等を概説し、その祭壇並に禮拜の諸儀を述べ、胎藏界曼陀羅に於ける孔雀明王の位置

を攷へ、最後に日支兩國に於ける眞言宗に於いて如何に孔雀明王の祭祀が行はれしかを例證して筆を擱けり。嚮に氏の著せる「日本及び支那に於ける地藏菩薩の研究」は量に於いて本篇と長短互に相隔つれど、その内容に於いて正にこれが姉妹篇をなすものと見るべく、相參看するに於いて一段の興味あるべきを信ぜんとす。次に第二七はシミット氏がデ・ホロオト氏年來の主張なる支那宗教思想の根柢たる所謂 *Universismus* の上代婚嫁の儀禮に現はれたる方面を論ぜるもの、ともかくも一面よりこの思想發展の迹を尋ね得たりと云ふべく、第二八ジーク氏の寄稿は前掲フランケ氏、コノウ氏、フアイスト氏等の說を讀むに豫め參照を要すべきものとも云ふべく、トカラ語にて記されたる佛典中の一説話を忠實に翻譯註解せしものにして、原説話は既にシーフナー氏が西藏所傳より譯出して學界に問へることありしもの、この一篇は著者がエルンスト・クーン (Ernst Kuhn)

教授第七十回誕辰祝賀記念論文集に寄せたる

“Die Geschichte von den Löwenmännern in tochterlicher Version”⁽³³⁾と一對をなすものにして原文は共にグリーンエーデル、フォン・ルコック兩氏トゥルファン將來のトカラ文 Tugayavakana の一節なり。

以上記す所の論文合せて三十篇、長短何れも等しからず、又その内容より云ふ時は或は之を論文と稱すること能はざるものなきに非れども、皆東洋學界に貢獻すること多きものにして學者の一讀を要するものなるは言を俟たず。之を通觀するに集る所の諸篇多くは自らヒルト博士の特に力を注ぎし研究主題の何れかに觸るゝ所あるが如く、即ちファリスト、 فرانケ、ヘルマン、コノウ諸氏の所説が「太秦全傳」⁽³⁴⁾「ヴォルガフンネン匈奴攷」⁽³⁵⁾等に依りて代表せらるゝ東西交通史・中央亞細亞歴史地理に關する博士の研究に接し、ザーレ、ツインメルマン二家の寄稿が「古陶研究」⁽³⁶⁾等に依つて代表せらるゝ博士の支

那陶磁器研究に關聯し、又ハーバート・ミューラー、キニメル、フィッシャー、乃至クレプス諸氏の所論が博士の「支那美術に於ける外國の影響」⁽³⁷⁾「支那繪畫史に關する支那の史料」⁽³⁸⁾「清朝畫人傳稗稿」⁽³⁹⁾等の諸研究に相觸るゝ所あり、ミューラー氏、マルクワールト氏等のコントリビューションが博士の「瞰欲谷碑跋」⁽⁴⁰⁾を中心とする中世北狄史の一部に關する研究と相即するものあるが如き、博士の壽を祝ふ者の期せずして意自ら茲に至りし結果なるべく、亦一奇と云ふべし。唯だ博士の「諸蕃志」攷證に依り代表せらるゝ南海の研究の一篇も寄稿なかりしは稍々寂寥の感なき能はず、これ必しも余一個の見に非るべしか。

次に近く公にせられんとする第二の記念論文集は

“Hirth Anniversary Volume Presented to Friedrich Hirth Professor of Chinese, Columbia University, New

York. In Honour of His Seventy-Fifth Birthday By His Friends and Admirers and Edited by B. Schindler Ph. D.」と題せられ、マンハイムの Proshmain & Co., J. Murray Wood より發售せられし。今右書肆より送り來れる豫告に據れば、前者が殆ど全部獨逸國內の學者のみに依りて寄稿せられしと異り本書は實に左記の如く英、獨、匈、瑞(典)支等諸國の學者の論説を網羅し、之に添ふるになほヒルト博士の肖像小傳、並に其著述目錄一篇を以てせんとすと云ふ。全一冊 Royal 8vo 約五〇〇頁、亦前者に劣らざる有益の文字を藏すべきこと大凡今より想ふに堪へたり。以下些かその論文の目次を轉載するに際し、未だ本書を見るを得ざるを以て其内容の一端を大く掲出し難きは余の深く遺憾とする所なり。従つて又各表題の譯語の如き、果してそのよく當れるや否や今遽に檢するに由なし。姑く記して後日校訂の機を待たんとす。讀者幸に之を宥し給はんことを。

- 一、ブロッケンマン氏「古代トランキスタンに於ける俗語」(第一) (C. Brockelmann, Altiranische Volkspoesie I.)
- 二、コンラディー氏「漢代所編南西北支那華夷兩語對照表」(A. Conrady, Ein südwestchinesischer Zweisprachentext aus der Han-Zeit.)
- 三、エドヴァルト・ヘンケス氏「『大學』(c.) 本文譯文及註譯」(Ed. Erkes, The Ta-chao Text, Translation and Notes.)
- 四、ジョン・フォーギエン氏「支那山水畫家論」(John C. Ferguson, Chinese Landscapists.)
- 五、フォルケ氏「政治家哲人としての晏嬰及び『晏子春秋』」(A. Forke, Yen Ying, Staatsmann und Philosoph und das Yen-se tsch'un-keh'in.)
- 六、ハナス氏「『論語』第二篇第十六章」(H. Haas, Lun-ju II, 16.)
- 七、ホプキンス氏「河南出土殷代遺物に見えたる

帝王系譜と殷(商)朝の記録」(L. C. Hopkins, The

Royal Genealogies on the Homan Relics and the

Record of the Shang Dynasty.)

八、カールグレン氏「漢字の分解に就いて」(B.

Karlgren, Contributions à l'analyse des Chars-
fères Chinois.)

九、アグネス・マイアー女史「現存最古の一支那畫
に就いて」(Agnes E. Meyer, On the oldest known
Specimen of Chinese Pictorial Art.)

一〇、ナーホッド氏「西洋に於ける漢字の知識と
の最初」(O. Nachod, Die ersten Kenntnisse chi-
nesischer Schriftzeichen im Abendlande.)

一一、ネメト氏「クルタイウス・ルッス⁸の書に見
えたる「トルコ語に就いて」」(J. Németh, A

Turkish word in Curtius Rufus)

一二、バーカー氏「古代諸文明論」(E. H. Parker,
Ancient Civilisations.)

一三、フォン・ロストホルン氏「中央アジアに於け
る高地堡に就いて」(A. von Roethorn, Die Hoch-
burg von Centralasien.)

一四、シントラー氏「至高諸神に關する支那人の
觀念」(B. Schindler, Conceptions of the Chinese
concerning the Supreme Gods.)

一五、スタイン氏「中亞出土支那古代絹貿易に關
する報告」(Sir Aurel Stein, Central-Asian Relics
of China's Ancient Silk Trade.)

一六、シテウエン氏「西北シベリアの住民マンシ
ー族の間に於ける熊の崇拜と戲劇とに就いて」
(R. Stille, The Cult of the Bear and the Drama-
tic Plays of the Mansie in North-Western Sibe-
ria.)

一七、ベンタン氏「支那山水畫訣」(Zoltán v. Ta-
kács, The Elements of Chinese Landscape Pain-
ting.)

一八、ワレンザー氏⁽³⁴⁾「漢藏兩資料に據る龍樹菩薩傳」

(M. Walleser, The Life of Nāgārjuna from the Chinese and Tibetan Sources.)

一九、エーデマイアー氏「紀元前二十世紀に於ける支那歴史の舞臺と事件」(第一)(André Wademeyer, Schauplätze und Vorgänge der Chinesischen Geschichte im 2. Jahrtausend vor Chr. I.)

二〇、ヘーラー氏「法顯『佛國記』」注釋」(F. Weller, Beiträge zur Erklärung Fa-lsien's.)

二一、ケルズン氏「アレキサンダー大王所築ゴグ・

マゴグ防禦の長城と西紀八四二年回教法皇ワト

ロンの送れる右遺址搜索の探検隊」(C. E. Wil-

son, The Wall of Alexander against Gog and

Magog and the Expedition sent out to find it

by the Khalif Wathing in 842 A. D.)

二二、ノキンチ氏(E. A. Vorelsch, Der Wu-Tschuan

Ting) (焦山の「無事鼎」なるべからず)。

二三、Z. L. Yih 氏「支那人ならん」『墨子』緒論」
(Introduction to Mo Tzu.)

なほ本書には、エーデマイアー氏の論文に對して大判の歴史地圖一葉、マイアー氏の論文に對してその主題たる古畫の複製を添ふべしといふ。唯、吾人の奇とするは豫告に二十四篇の論著を蒐むといふも實は二十三篇より記載しあらざる一事とす。思ふに或は別に未到の一篇あるに非るか。いづれにせよ本書の發刊到着を俟ちて改めて内容の梗概を紹介する所あるべし。

參照

(1) 同誌は Otto Kinnel, William Gohn, Erich Harnisch 三氏の編輯する所、本論文集亦或は右三氏の編に成るか。

(2) 此の肖像は七八年前の雜誌「Asia」誌上に掲出せられたものと原板を同じうするものと認めらるゝを以て、最近のものと云ふべし、この年より新しきものと云ふべし。

(3) F. Hirth, The Story of Chang K'ien, China's Pioneer in Western Asia. Text and Translation of Chapter 128 of Ssu-ma Ts'ien's Shu-ki (JAOS, XXXVII, 1917), p. 90 並に拙稿「史記大宛列傳の英文全譯」(「東洋學報」第八卷「大正七年」)二九五

耳審照。

- (4) De interfectionum uan Plarino Tereulanoque Doctor Dissertation, hauptsächlich über den Gebrauch der Epiphonemata. Rostock, 1869.
- (5) 412 ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ JAOS, XXXVII, 1917, pp. 80-152.
- (6) 廖/ 王 L. Wolzoh, Aus den Gedichten Po Chu-Ts, Peking, 1908; H. A. Giles, A History of Chinese Literature, London, 1901, pp. 169-175; D'Hervey de Saint-Denis, Poésies de l'époque des Thang, Paris, 1862, pp. 237-240; A. Waley, A Hundred and Seventy Chinese Poems, London, 1918, pp. 115-168; W. J. B. Fletcher, 英譯唐詩選 Gems of Chinese Verse, Translated into English Verse, Shanghai, 1918, pp. 142-4. 等。其他著を脱びし令書に於て、而して其の二三を列記する所以は國語漢語類(漢語類集中に在する其々一家の作は) Cordier 氏の "Bibliotheca Sinica" に就き容易に檢出する事能はるるを以てなり。(上掲中のリッチャー氏の書は所謂「唐詩選」の譯に非ず。「英譯唐詩の選集」の意なり。又マレー氏の書には白氏の詩五十七首を載録す)。
- (7) Anna Bernhardt, Tan Juan-ming (865-488) Leben und Dichtungen (MSOS, Jahrg XV, 1912, ss. 58-117). — u. E. von Zsach, Two Juan-ming (Sonnenabdruck aus d. MSOS, Jahrgang XVIII, 1915).
- (8) E. Wehner, Alter und Bedeutung der babylonischen Astronomie und Astrologie nebst Studien über Fixsternhimmel und Kalender, Leipzig, 1914, ss. 54-56, 62 Anm. 1. 2. 等。其は同類向の説乃因チチニモナシ。
- (9) 現在是如何に考へらるべき未だ之を知らずと雖、ハ・リッソンの H. Lüdtke 著 (Über die literarischen Funde von Ostturkistan, Sitz. d. Königl. Preuss. Akad. d. Wiss., 1914, VI, Sonderabdruck, s. 5) 及び著者松田博士(轉近に於ける東洋史學の概観)「東林」第三卷第一號(大正七年一月)六一—六二頁)も著し斯くの如く解釋を有せられしものなり。
- (10) 近著の刊行に際し本邦の學界に未だ廣く紹介せられざるものなり。F. W. K. Müller und E. Sieg, Mitteilungh und "Tocharisch" (Sitz. d. Preuss. Akad. d. Wiss., 1916, xv), Shen Konow, Indisch-tyrische Beiträge (Dito, 1904-16); E. Sieg, Ein einheimischer Name für Toxri (Dito, 1918, xxvii); F. W. K. Müller, Toxri und Kūšan (Kūsko) (Dito, 1918, xxvii); O. Franke, Einige Bemerkungen zu F. W. K. Müllers, Toxri und Kūšan (Kūsko) (Oriental. Zeitschr., VI, Jahrg. Heft 1/2, April/Sept. 1917, 83-86). 等々著し、その他はハ・リッソンの脚註に引く所殆ど之を悉するの觀あり。
- (11) ハ・リッソ氏は本篇を拜するに方り、光緒六年(一八八〇年)荊州出版の「清文總彙」を參考するが、これヲラン・リッ氏が滿洲文字の文獻は北京以外に出版せられしものなかりとて、其の如く足題をなすものなり(「東林」S. 171, Anm. 4). ハ・リッソ氏の説は "Sketch of Manch. Literature, 1908, P. 10 2. 等)。
- (12) この書の完結は既に述べた如く、Bibliotheca Sinica, III, Column 1968; Yale and Cordier, Marco Polo, II, pp. 550-560, [No.] 13 等々。
- (13) 天地陰陽は天地陰陽五土陰陽五土の如く、ハ・リッソ氏は Universum, Universalismus, 等する所より、其の宗教思想の本質をなすものなり。氏の足題は "The Religion in China."

- (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)
- Universität, a Key to the study of Taoism and Confucianism," New York and London, 1912. 道家と儒教の根本の考察
- "Universismus und der Wissenschaftlichen Chinas," Berlin, 1918. 世界主義と科学的中国
- に更なる展開がある。これを簡単に知らんとせばやむを得ず、筆者の著述に依るもの紹介 (Orientalische Zeitschrift, VI Jahrg, Heft 3/4, Okt. 1917/März 1918, ss. 279-289) なる一見すべし。
- 西紀十世紀初頭にサード朝の宰相たりし人。
- "Über das Volkstum der Komannen," ss. 59-93; 205 ff.
- "唐會要" 卷九十八及び"太平寰宇記" 卷百九十九に見ゆる鐵勒中の九姓と混すべからず。羽田學士九姓回鶻と"Tokuz Oyuz"との關係を論じ、(『東洋學報』第九卷 第三號、大正八年一月、一六二頁) 著述。
- "Colección de Documentos, Inéditos, relativos al descubrimiento, conquista y organización de las antiguas posesiones Españolas en América y Oceanía, sacados de los Archivos del Reino, y muy especialmente del Indias por D. Luis Torres de Mendoza," Tomo V, Madrid, 1868.
- (17) 上記の書 pp. 117-209. 題して "Relación del viaje que hizo desde la Nueva-España á las islas del Poniente Ray Gomez de Villalobos, por orden del virey D. Antonio de Mendoza." 云々。
- Antonio Galvão の記す所など、未だ以て「稍々詳細なる」記事とならざる難し。
- "A Contribution to the history of the discovery of Japan," (Transactions and Proceedings of the Japan Society London,
- (30) (29) (28) (27) (26) (25) (24) (23) (22) (21) (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)
- Vol. XL 1914, pp. 239-260)
- "The Boishieiva Tri-Tsang (Tib) in China and Japan." Sonderveröffentlichungen der Orientalischen Zeitschrift, Bd. 1, Berlin, 1914.
- Bulletin de l'Acad. Imp. de St.-Petersbourg, Tome XXI, St.-Pét., 1876 等。
- "Aufsätze zur Kultur und Sprachgeschichte, vornehmlich des Orients, Erst Kuhn zum 70. Geburtstag am 7. Februar 1916 Gewidmet von Freunden und Schülern," Breslau, 1916, ss. 147-151.
- "China and the Roman Orient. Researches into their Ancient and Medieval Relations as represented in Old Chinese Records," Shanghai and Leipzig, 1885.
- "Über Volgo-Türken und Hwang-nu." (Sitz. Königl. Bayer. Akad. d. Wiss., Phil. hist. Kl., 1899, II.)
- "Ancient Porcelain: a Study in Chinese Medieval Industry and Trade," Shanghai and Leipzig, 1888. (Also in JN-OBAS, No. 23, 1887.)
- "Über fremde Einflüsse in der Chinesischen Kunst," München und Leipzig, 1886. (Auch zum Teil im Jahrbuch der d. Geogr. Gesell. zu München für 1894-95.)
- "Über die einheimischen Quellen zur Geschichte der chinesischen Malerei," München und Leipzig, 1897.
- "Scraps from a Collector's Note Book being Notes on some Chinese Painters of the Present Dynasty," Leiden &c., 1905. (Also: T'oung Pao, Tome VI, IIe Série.)
- "Nachworte zur Inschrift des T'oujunkt" (Radloff, Die alttürk.

Inschr. d. Mongol. Ste Folge, St. Petersburg, 1892.)

(31) 果して如何なるものを指すや明かならず。「方言」の一節にてもあるべきか。

(5a) Tschao と譯書にあるも Tschiao (≡ Tschiao) 即ち大學の誤にあらざるか。マルクス氏は近く「中庸」の研究を公けにせるに稽古 (MESOS, Jahrg. XX, 1917, ss. 142-154) 敢てこの想像を試む。

(93) 西紀一世紀)或は云ふ二世紀)のローマの史家。アレクサンダー大王に關する著を以て著はる。

(94) ヲレザール氏は遺次の大戦中戦死せりと傳へらる。(渡邊海旭氏「歐米の傳説」東京、大正七年、序文三頁)。

〔追加〕

(16a) 白鳥博士「可汗・可敦稱號考」(「東洋學報」第十一卷第參號、大正十年八月)三〇八頁、三五二—三頁。

○(15)に關する論文は「Abhandlungen d. Königl. Gesellschaft d. Wiss. zu Göttingen, Philol.-hist. Kl. Neue Folge, Bd. XIII, Nr. 1, 1914, ss. 25-238」に收む。前に記し落さしを可く按て追記す。